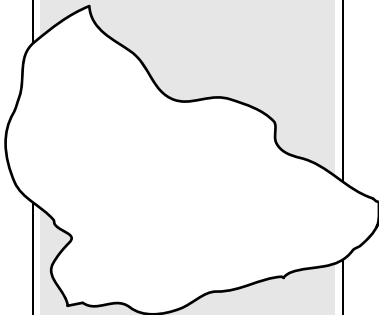


桑折町



桑折町長
高橋 宣博



面積 42.97km²
人口 12,086人
(H26・9・1 現在)

が本格的に始まる4月に側溝清掃や道路清掃を主に行い、秋は11月1日の「阿武隈川の日」に合わせ、その直前の日曜日を基準として一斉清掃活動を実施しておりました。

しかし現在は、3.11の東日本大震災を起因とした放射能汚染により、町内の住宅除染等が完了するまでの間、自粛をしているところ です。

支流の産ヶ沢川においては、町独自に毎年、水質調査を実施し定期的に監視を行っています。

●阿武隈川と桑折町

本町は、福島県中通り地方の北端部に位置し、山林や農地などの自然的土地が町の約7割を占める豊かな自然環境を有しています。町の南東部は、南から北へ流れる阿武隈川沿いでは平坦な農地が広がり、西北部は奥羽山系の半田山(標高863m)を中心とする山林とそれらに連なる丘陵地であり、中央部はこの半田山を水源とする産ヶ沢川や佐久間川等により形づくられた扇状台地の平坦地で、中心市街地が形成されています。

本町の阿武隈川治水事業の歴史は江戸時代にさかのぼりますが、本格的な工事となったのは大正11年から始められた、桑折町・国見町の蛇行箇所を3,000mにわたって流域変更した新河川開さく工事でした。この工事は、12年の歳月をかけて昭和8年に完成し、現在の堤防となっています。

また、阿武隈川は、交通路として重要な役割を果たしてきました。水路利用の当時には舟運として栄え、引き船、渡し舟、蒸気船使用にまで至ったこともありました。町内には、その当時がしのばれる地名として「庫場」「舟場」などが現在も残っています。

洪水について記録には、享保8年(1723)・宝永14年(1717)の大洪水、さらには、明治23年・昭和16年の洪水は未曾有の被害であったといわれています。また、昭和61年8月、平成元年8月、平成10年8月、平成14年7月の台風など、近年の異常気象による大きな被害も増えてきています。

●取り組みの現状

毎年6月には、阿武隈川支流の産ヶ沢川で「ホタル祭り」や「ホタル観さつ会」などが開催され、幻想的なホタルの光が訪れる人の心を魅了します。この地区では、「蛍保存会」や「夢ほたる・こおり」が、ホタルの生息域である産ヶ沢川の水質・環境保全を図るため、毎年清掃活動などを行っています。

町内においては、主に町内会を活動単位として、春は農作業



▲産ヶ沢川のホタル



▲阿武隈川と伊達崎橋と半田山

●今後の課題

本町には、貴重な水源である産ヶ沢川をはじめ、阿武隈川へ流れる3つの川があり、河川の水質保全については一定基準を保っていますが、生活排水浄化対策が重要課題であると認識し公共下水道への接続、また、公共下水道認定区域外についても、合併処理浄化槽設置の推進に努めていかななくてはなりません。

このようにして、清らかでやすらぎのある河川にするための、公共下水道施設の整備、合併処理浄化槽設置費の補助など、水質汚濁防止に係る施設整備を進めていかななくてはなりません。

●今後の取り組み

私たちの生活から出る生活排水やゴミの不法投棄などにより、水質並びに環境は悪化していきます。町では、公共下水道事業、合併処理浄化槽整備事業などを推進するとともに、町民への水質・環境保全に対する意識付けを図るため、町の広報紙やホームページなどを利用した啓発活動に努めます。

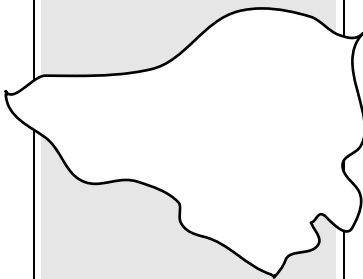
また、11月1日の「阿武隈川の日」を中心とした町民総参加による一斉クリーンアップ作戦など環境美化活動を行ない、水質や環境を守る気質の定着を一層推進していきます。

しかしながら、今後の取り組みを行っていくうえでも東日本大震災及び放射能汚染問題からの復興を第一に考え、3.11以前の自然環境へ一日も早く復旧することが必要と考えます。

国見町



国見町長
太田 久雄



面積 37.90km²
人口 9,510人
(H26・9・1 現在)

●国見町と阿武隈川

国見町の概略

国見町は、福島県の最北端に位置し、北は宮城県白石市、東は阿武隈川を挟んで伊達市、南は桑折町と隣接し、信達盆地の肥沃な土地に恵まれた町です。最近10年間の年間平均気温が13.1度、最高気温は平成6年8月に38.8度、最低気温は平成13年1月に-9.0度を記録しており、比較的寒暖の差がある気候となっております。

また、県都福島市に16.5kmの距離にあり、南北に東北本線(藤田駅・貝田駅)、東北新幹線・国道4号線が走り、さらに東北縦貫自動車道の国見インターチェンジを有し、交通の便にきわめて恵まれています。水源としては、阿武隈川本流のほか、支流として、滝川・佐久間川の2河川が存在し、ともに1級河川として知られています。

主な産業は農業で、米や果樹(もも・りんご・柿・サクランボなど)、畜産、野菜などが盛んであります。毎年5月5日のこどもの日には、これらの産物を町の憩いの場である観月台公園に集め農業市が行われ、近隣市町からの買い物客が多数訪れます。また、当町には源義経にまつわる歴史や史跡が数多くあることから、9月23日に国見義経まつりを実施しており、毎年盛況なにぎわいを見せております。

阿武隈川の水運の歴史

寛文4年(1664年)、上杉藩の半地削封によって信夫・伊達両郡および出羽国の屋代郷(現在の山形県高島町)は、幕領となり村々からの年貢米(御城米)は江戸に回送されました。幕府は、渡邊友意や河村瑞賢などに逢隅川(現在の阿武隈川)の水路を改修させて、高島の御城米は七ヶ宿街道を小坂峠越えに伊達崎川岸から、信夫・伊達郡の御城米は福島、桑折、徳江、東大枝などから運ばせました。

また、江戸時代中期には、徳江川岸と呼ばれた船着き場があり、そこから江戸に年貢米が運ばれ、川の両岸には米倉が立ち並んでいました。明治以降は、米の運搬だけでなく、徳江地区と対岸の伊達市梁川町栗野地区を結ぶ貴重な足にもなり、「徳江渡し」として多くの人々に利用されました。

しかし、時代の流れとともに利用者も減り、昭和51年、広域営農団地農道整備事業により徳江大橋の建設が決まったことから、「徳江渡し」は廃止となりました。

●取り組みの現状と課題

治水関係

当町の治水関係に関して、阿武隈川においては、平成10年8月の豪雨水害による平成の大改修が行われ、一定の整備がされ安全性は向上していますが、今後もより一層の整備が必要と考えております。阿武隈川沿いの徳江地区及び川内地区には樋管が存在し、洪水時阿武隈川の水位が上昇した際の逆流を防ぐのに大きな役割を果たしております。

また、伊達市梁川町東大枝地区に設置されている大枝排水機場は、主に国見町川内地区から流れる水を阿武隈川本流へ放流する際の調整機能を備えており、浸水被害軽減の役割を担っております。

さらに、国土交通省によって作成された国見町の防災マップには、阿武隈川と阿武隈川の支流が大雨によって氾濫した際の浸水状況が記載されています。特に、当町川内地区及び佐久間川と阿武隈川の合流地区においては、浸水した場合に想定される水深が国見町内で最も深く5.0m以上となっております。このため、大雨の際には、両地区からの浸水に対して特に警戒しています。



▲徳江渡し跡記念碑



▲徳江地区阿武隈川

利水関係

利水に関しては、都市化の進展や生活様式の多様化により、生活排水による河川の水質汚濁が懸念されておりました。そのため、平成8年には、阿武隈川流域の公共用水域の水質保全と生活環境の改善を図ることを目的として、当町徳江地区に県北浄化センターが建設され、供用が開始されました。

また、当町におきましては、「下水道排水設備等整備資金利子補給制度」によって公共下水道早期接続の推進を図っているほか、公共下水道事業区域外の生活排水等の処理については、単独処理浄化槽から合併処理浄化槽設置への転換を促す必要があることから、「合併処理浄化槽設置整備補助事業」による合併処理浄化槽の普及を推進しております。

住民の皆様が、身近な水路や河川の水環境に目を向け、「生活排水」が、汚れの原因になっていることを認識し、水質浄化に対する関心を深めるよう意識の高揚を図る啓発普及活動も必要であると考えております。

●未来へのメッセージ

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う原発事故は、阿武隈川にも影響を及ぼしました。川の水や川の土壌、川岸の堆積物などへの放射性物質の汚染が懸念されております。そのため、震災以前と比較して、阿武隈川での活動が減少しているような状況であり、その結果、阿武隈川に対する親しみが失われてきているのではないかと感じております。

また、近年は、異常気象による集中豪雨や台風による被害が増加しており、国見町においても河川からの浸水に備えた対策を徹底しているところであります。

今後も、治水対策による地域安全の確保、水害に強いまちづくりを進めながら、清らかな水の流れを守り、人に優しい潤いと安らぎのある憩いの場としての川づくりを推進していきます。そして、次の世代に素晴らしい阿武隈川の自然環境を残せるよう、より一層の努力を続けてまいりたいと思います。

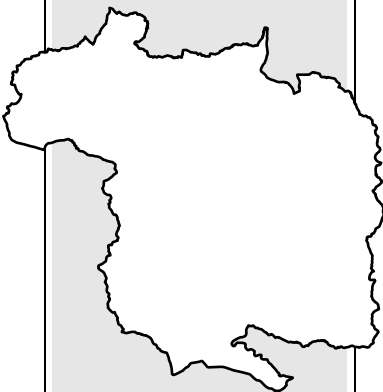


▲山崎地区阿武隈川支流の滝川

丸森町



丸森町長
保科 郷雄



面積 273.34km²
人口 14,383人
(H26・9・1 現在)



▲ランドマーク的な役割が期待される丸森大橋

●阿武隈川と丸森町

丸森町は宮城県の最南端に位置し、北東部は500m内外、北西部は300m前後の阿武隈山脈の支脈で囲まれた盆地状の町です。町の北部には阿武隈川が貫流しており、町を取り巻く山々に源を発する大小の谷川は互いに合流し北に向かって流れ下り、そのほとんどが阿武隈川に注いでいます。

阿武隈川はかつて、川船の航路として、またサケの漁場として地元の経済や産業の発展に大きな役割を果たしていました。しかし、その一方で度々洪水を起こし、家屋や田畑への被害が町民を悩ませてきました。安政4年（1857年）の大洪水後に「関東屋土手（角田市）」と呼ばれる堤防が築かれ、その頃は、冠水地域に高木に仕立てた桑を植えて、川が氾濫したときには舟で桑を摘み、二階から出入りして蚕を飼っていたそうです。丸森町や角田市の伊具盆地が有数の養蚕地に発展したのも、阿武隈川の氾濫に対する先祖の苦心と知恵があったからだと思えます。また、沿岸地域に住む人々の生活に多大な影響を与えたことは、丸森町内の地名からも伺うことができます。例えば、旧丸森橋から上流部は、岩を砕くような激流であるため「滝ノ上」「大巻北（南）」といった「滝」や「巻」といった字を含む地名が多く、これは流れの激しい箇所は非常に変化や特徴があること、漁労のため川の様子や状態をよく知る必要があることから名づけられたものと考えられます。

こうして古来より、阿武隈川と深く関わってきた私たちの暮らしも時代とともに形態を変え、主要道路の整備と鉄道敷設が進むにつれ川運の影は薄れていきました。今日では、溪谷、岩稜等自然に富んだ景観をもつ阿武隈溪谷県立自然公園を始めとし、阿武隈川の舟運の名残を今に伝える観光船「阿武隈ライン舟下り」が丸森町有数の観光スポットとして町内はもとより県内外からのお客様に好評を博しています。

●取り組みの現状

阿武隈川によって二分されている町の北西部と東部に架かるのは、最近まで、上流から羽出庭大橋（昭和51年完成）と丸森橋（昭和4年完成）の2つの橋だけでした。平成24年5月31日に国道113号の舘矢間バイパスの開通に併せ、丸森橋の下流に丸森大橋が完成したことで町内の橋は3本となり、町中心部の交通混雑の解消や、物流や観光、災害時の対応などに大きな役割を担うことが期待されています。橋の構造は、県内では初となるブレースドリブ・タイド・アーチ構造の橋であり、外観はトラス橋（三角形を基本単位としてその集合体で構成する

構造形式）でありながらアーチ橋でもある日本国内では5例目となる特殊な形状をしています。新しい橋は、「モダン橋」の愛称で親しまれている丸森橋と併せて町のランドマークとして産業や観光の振興に大きく寄与することが期待されているほか、阿武隈川の景色を飾る新たな素材として町民からも親しまれていくことでしょう。

●今後の課題

このように、有史以来、川とともに生活を営み、川の恩恵を受けながら歩んできた丸森町ですが、平成23年3月



▲新旧丸森橋の共演

の福島第一原子力発電所の事故による放射性物質の拡散により、洪水などの自然災害とは比較できない大変深刻な影響を受けることになりました。

前述したとおり、阿武隈川の観光スポットとして好評を博していた「阿武隈ライン舟下り」は、航路の放射能汚染の心配や風評により、前年比約25%と大きく来場者を減らしました。また、阿武隈川に関連する行事、活動の中止も余儀なくされ町全体の観光客も大幅に減らすこととなりました。また、同時に、アユやヤマメの出荷制限指示やウナギの出荷自粛要請を受け、阿武隈川を漁場として生活を営む景色の一場面を見ることができなくなりました。

原子力発電所の事故から、3年以上が経過した今、丸森町では、住宅の除染が本格化するなど、放射能の問題に行政と住民が一体となって取り組み、少しずつではありますが確実に生活環境の改善に向け歩を進めています。阿武隈川においても、町内小学校の児童が阿武隈川の支川である内川に大きくなって戻ってくることを願いながら、さけの稚魚を放流したり、自主禁漁が続いているアユの稚魚を漁協が放流するなどして、川の生物環境を事故前に戻す取り組みを進めておりますし、「阿武隈ライン舟下り」も、航路の安全性の発信や、趣向を凝らしたイベントの開催により、事故前の約半数近くまで来場者が戻っています。これからも阿武隈川を愛する人たちに変わらぬ阿武隈川を感じてもらえるような取り組みを進めてまいります。

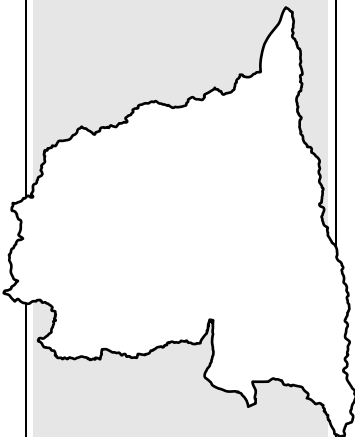
●未来へのメッセージ

丸森町は今年、昭和29年に旧丸森町、旧金山町、旧筆甫村、旧大内村、旧小斎村、旧館矢間村、旧大張村、旧耕野村の2町6村が合併してから60年目の節目を迎えます。60年と言っても、阿武隈川の悠久の歴史からすればほんの一瞬に過ぎないかもしれませんが、丸森町の発展が阿武隈川なくしては考えられないほど、密接な関わりを持っていることを考えるとき、私たちがそうであるように、先人が想い、感じてきた景色をこの先何十年、何百年と私たちの子孫に伝え続けていけるよう、「母なる川」阿武隈川とともに、確かな歩みを続けていきたいと考えております。

角田市



角田市長
大友 喜助



面積 147.58km²
人口 30,223人
(H26・9・1 現在)



▲市民の交流の場パークゴルフ場

●阿武隈川と角田市

本市を流れる阿武隈川は、緩やかな蛇行を重ねながら市の中央を南北に貫流し悠久の流れを誇っており、かつては川沿いに通りやすい道はなく、大方は船による交通が主で、それでも昔から梁川、保原方面と人の行き来も盛んでした。川を挟むまちの東西の交流も専ら渡し船に頼っていましたが、今では、市内に角田橋、東根橋、枝野橋の三橋が架かりそれぞれ交通の要衝となっています。

古くより伊具盆地は洪水の常襲地帯であり、何度も歴史に残る大洪水に見舞われました。阿武隈川を利用した舟運の集積場や石川氏の城下町として栄え、国の重要文化財高蔵寺阿弥陀堂をはじめ、独自の歴史文化圏を築いており多くの文化財があります。また、環境保全地域の指定を受けている深山や斗蔵山などの自然環境にも恵まれております。

また、阿武隈川兩岸の堤防はウォーキングやサイクリングコースさらに豊かな自然と広大な河川空間が整備され市民ゴルフ場やパークゴルフ場・グライダー滑空場のスポーツ広場として、大人から子どもまで幅広く楽しめる空間となっています。また毎年行われる菜の花まつりや阿武隈リバーサイドマラソン大会など本市を代表するイベントの場ともなっており市民の心を癒すふるさとの原風景となっています。

●取り組みの現状

本市を流れる水は、全て阿武隈川に注ぎ込まれておりますので、一般家庭の生活排水対策が重要であり、力をいれております。また、阿武隈川は飲料水として市民の生命を育み、農業用水として広大な耕地を潤しております。本市では、公共下水道整備事業、農業集落排水施設整備事業、浄化槽設置整備事業などを積極的に実施しております。水田や里山に抱かれている畑地は、食料生産という本来の役割によって私たちの生活を支えると同時に、独自の生態系を形成し、昆虫類、爬虫類など身近な生物の生息の場として、また、水源の涵養機能など、別の観点から環境の保全に大きく貢献しています。

また、環境保全型農業を進めており、農薬や化学肥料を不適切に使用することによって、河川や池沼、土壌、地下水などが汚染されないよう、農地が環境の保全に果たす役割を理解し、農家・市民・行政が協力・連携してその機能が十分に発揮されるように努めております。本市には、水辺環境を支えてくれる環境ボランティア団体が、河川のごみ拾いや河川の浄化を図るため、EM発酵液やEM菌を練り込んだ土団子を投入するなど、清掃活動や浄化活動を行っております。また、重要文化財の高蔵寺と旧佐藤家住宅、その周辺の農村公園や入の坊滝までの

区域を中心に、高蔵寺ホテルの里づくり事業が行われ、地域のボランティアの皆さんによるホテルの生息や環境整備や啓蒙活動、ホテルの幼虫の飼育活動の一環として、高蔵寺ホテルまつりが開催されています。

●今後の課題

阿武隈川の水質は、生活排水などの流入により汚濁が進んでいましたが、有機物等の汚濁指標としての生物化学的酸素要求量（BOD）については、平成14年度以降徐々に改善傾向が認められ、近年はBODの環境基準値に適合し



▲ゆるやかな蛇行を描く角田市内の阿武隈川

ている状況です。市街地を流れる河川のうち、小田川、高倉川、桜井川、半田川などの河川については、環境基準（BOD）は概ね良好な状態を維持していますが、尾袋川や雑魚橋川など一部の河川では、生活排水や畜産排水の流入と考えられる汚濁がみられ、公共下水道の計画的な整備や合併処理浄化槽の普及を促進し、河川の水質改善を図る必要があります。排水処理率80%以上をめざすとともに、上流地域への更なる努力を求め、安心して飲めて使える水として、下流地域へ引き継ぎます。また、増え続ける河川や森林への不法投棄対策について管理者（国・県等）の連携の強化を図るとともに、仙南地域広域行政事務組合の構成市町及び関係機関と連携して、広域的な不法投棄対策の検討を進めてまいります。

さらに、阿武隈川流域市町村との連携を強化し、阿武隈川の環境保全活動の推進を図る必要があります。

本市の農業地は、大部分は阿武隈川の両岸に開けた平坦な農用地となっており、平坦地の田園・集落を洪水の被害から守るため、国営かんがい排水事業をはじめ排水施設など生産基盤整備を推進し、安全で安心な農畜産物の生産と環境保全型農業への取り組みをより一層浸透させていきます。

●未来へのメッセージ

古来から本市の歴史と文化をはぐくんできた阿武隈川。豊かな水と自然を擁し、多様な生態系や景観など魅力的な多くの資源に恵まれています。こうした資源をまちづくりに利用し、活用していくことが大いに期待されています。

森林や農用地、公園等の緑地は私たちに安らぎを与えてくれるだけではなく、水や空気の浄化等、それ自体が環境保全のための役割を果たしています。先人が残してくれた美しい自然を守るため、行政のみならず、市民一人ひとりがあらゆる角度から取り組むことが不可欠となっています。市民一人ひとりが家庭でできる生活排水対策や事業所などの排水対策の実行、行政による下水道整備の推進、合併処理浄化槽の普及などを進め、水辺環境の保全や市民意識の高揚と併せた総合的な施策を推進し、心と生活を潤す清らかな水を取り戻します。

また、例年開催していた、いかだ下り大会や阿武隈川カヌー駅伝等の水上スポーツが東日本大震災以後途絶えていますが、再開に向けまた、それに代わる水辺のイベントの開催を支援し、市内外の交流を深めます。